教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 心理学科　　資格： 教授　　氏名： 玉木　健弘

研究分野	研究内容のキーワード
臨床心理学，教育臨床心理学，犯罪心理学	攻撃性，不登校，いじめ，発達障害，社会的情報処理過程，心理検査法
学位	最終学歴
博士（学術），修士（教育学）	徳島文理大学大学院 家政学研究科 人間生活学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.進路選択における受動的態度から能動的態度への行動変容の試み	2014年4月～2015年3月	初期演習の授業の中で、学生の進路選択意識の形成および向上を試みた。キャリアセンターが提供するプログラムの活用だけでなく、独自プログラムを実施した。 プログラムは、①書籍やインターネットを使用して、進路について学生個人が考える。②保護者や知り合いの社会人に対して、インタビューを行う。③グループで、①と②の資料を出し合い、グループ討議を行う。④これまでの資料を基に、グループで話し合った内容をパワーポイントを用いて発表する。 以上の事を行った。
2.専門論文の読み方	2012年4月～2013年3月	初期演習および専門演習ＩAの授業の中で、心理学および社会福祉学の専門論文を読むための基本的な知識を身につけるため、実際の専門論文を読み、読み方の訓練を行った。希望するコースの専門論文だけでなく、希望しないコースの専門論文を読むことで、人間理解を深め、論文のおもしろさを気づくことを目指した。
3.講義内容の理解を深めるための双方向授業の実施	2011年4月～2016年8月	短大心理学概論Bの授業の中で、毎回の講義で生じた疑問を解決するため、毎回の講義終了後に質問カードを配付している。質問カードに記入された質問を次回の講義で説明し、講義内容の理解を高めている。
4.心理査定法の取得	2009年4月～2022年8月	大学院の科目である臨床心理査定特論Ｉにおいて、①予習－②確認テスト－③実習－④復習のサイクルで、心理査定法の理論、解釈方法、ならびに実施方法を身に修得させている。
5.「教養ゼミ」におけるピア・サポート訓練	2008年4月～2008年7月	1年生対象の必修授業である教養ゼミにおいて、大学生活への不安を取り除き、大学生活への適応を促すためにピア・サポート訓練を行った。自己理解と他者理解、自己表現、コミュニケーション、傾聴など、ねらいごとに課題を設け、毎回、実習と振り返りを中心とした体験学習を行った。本プログラムは、継続的に実施されているプログラムであり、個の成長と対人関係の構築に役立っている。
6.地域貢献を兼ねた心理学課題実習の実践	2006年9月～2007年3月	大学生3年生の心理学課題実習として、不登校児童生徒を対象としたキャンプスタッフとして大学生が参加をした。このキャンプは、広島県教育委員会が主催する青少年の自立支援事業として行われるものである。この事業に参加するにあたり、大学生は、不登校児童生徒との関わるための必要な知識や技能を学習した。
7.地域貢献を兼ねた心理学課題実習の実践	2005年9月～2006年2月	大学生3年生の心理学課題実習として、不登校児童生徒を対象としたキャンプスタッフとして大学生が参加をした。このキャンプは、広島県教育委員会が主催する青少年の自立支援事業として行われるものである。この事業に参加するにあたり、大学生は、不登校児童生徒との関わるための必要な知識や技能を学習した。
2 作成した教科書、教材		
1.心理実践実習（学内）の手引きの作成	2022年4月1日～現在	大学院の公認心理師養成科目である心理実践実習（学内）の手引きを作成した。
2.心理実習の手引き(見学実習)の作成	2021年4月1日～現在	公認心理師養成科目である心理実習(見学実習)の手引

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
		きを作成した。
3.心理実習の手引き(参加実習)の作成	2021年4月1日～現在	公認心理師養成科目である心理実習(参加実習)の手引きを作成した。
4.仲間関係づくりおよび討論能力向上資料の作成	2016年4月1日	初期演習で使用する仲間関係づくりおよび討論能力の向上を目指した資料を作成している。
5.初期演習における文章作成訓練	2011年4月1日	心理学レポートの作成および就職活動で必要となる文章作成能力の向上を目的として、課題プリントなどの作成を行った。課題プリントは、基本的な文章の書き方から段落構成などを含み、初期演習の時間に実施した。
6.心理学実験実習教材	2006年4月1日	心理学実験実習で使用する教材の要求水準ならびに質問紙の作成の章を担当した。まず、要求水準の章では、実験計画の立て方、実験方法、結果のまとめ方、考察など基本的なことが学べるように作成した。質問紙の作成の章では、質問紙に作成での注意点、信頼性、妥当性などの専門用語の説明をするとともに、実際に質問紙を作成することにより、理論だけでなく実践面でも学ぶことができるように作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.神戸家庭裁判所尼崎支部研修会の講師	2023年12月27日	神戸家庭裁判所尼崎支部研修会の講師を務めた。
2.令和5年度こども発達支援センター青空　第5回ご家族向け研修会	2023年10月30日	大阪府障害者福祉事業団が所管するこども発達支援センター青空の療育利用児家族を対象とした研修会の講師を担当した。研修の内容は、親と子の関わりの中での感情のコントロールについて説明を行った。
3.神戸家庭裁判所技法研修会の講師	2021年12月15日	神戸家庭裁判所技法研修会の講師を務めた。
4.神戸家庭裁判所尼崎支部研修会の講師	2021年9月7日	神戸家庭裁判所尼崎支部研修会の講師を務めた。
5.令和3年度教育相談研修会の講師	2021年8月19日	高槻市教員センターが実施する令和3年度教育相談研修会の講師を務めた。
6.令和2年度教育相談研修(兼)養護教諭研修、フレッシュ・教師力、幼稚園・認定こども園研修子ども・若者支援のための講習会の講師	2020年8月20日	高槻市教員センターが実施する令和2年度教育相談研修(兼)養護教諭研修、フレッシュ・教師力、幼稚園・認定こども園研修子ども・若者支援のための講習会の講師を務めた。
7.神戸家庭裁判所技法研修会の講師	2020年2月25日	神戸家庭裁判所技法研修会の講師を務めた。
8.神戸家庭裁判所技法研修会の講師	2019年2月28日	神戸家庭裁判所技法研修会の講師を務めた。
9.倉敷市児島地区中学校生徒会リーダー研修会の講師	2018年12月25日	岡山県警察本部が主催する第2回倉敷市児島地区中学校生徒会リーダーズ研修会の講師を務めた。
10.神戸家庭裁判所自庁研修会の講師	2018年3月2日	神戸家庭裁判所自庁研修の講師を務めた。
11.倉敷市児島地区中学校生徒会リーダーズ研修会の講師	2017年12月25日	岡山県警察本部が主催する第2回倉敷市児島地区中学校生徒会リーダーズ研修会の講師を務めた。
12.倉敷市児島地区中学校生徒会リーダーズ研修会の講師	2017年8月24日	岡山県警察本部が主催する第1回倉敷市児島地区中学校生徒会リーダーズ研修会の講師を務めた。
13.大阪市家庭児童相談員事例研究会の講師	2017年3月20日	大阪市の家庭児童相談員研修会の講師を務めた。
14.岡山市立操山中学校における非行防止教室の講師	2017年2月21日	岡山県警察本部が主催する非行防止教室の講師を務めた。
15.岡山市立富山中学校における非行防止教室の講師	2017年2月21日	岡山県警察本部が主催する非行防止教室の講師を務めた。
16.広島家庭裁判所自庁研修会の講師	2017年2月20日	広島家庭裁判所自庁研修の講師を務めた。
17.広島家庭裁判所の研修会講師	2016年7月11日	広島家庭裁判所で知能検査についての研修会で講師を務めた。研修会では、知能検査の実施方法、活用について講演を行った。
18.人間発達・教育研究会の研修会講師	2016年5月29日	人間発達・教育研究会の研修会で教育現場での心理検査の活用について講演を行った。
19.岡山県警察本部非行防止研究の講師	2016年5月20日	岡山県警察本部が実施する非行防止研究の講師を務めた。
20.広島県神石郡神石高原町の保育士研修会講師	2016年5月9日	神石高原町の保育士研修会で，子どもの主体性を引き出す保育について講演を行った。
21.広島家庭裁判所での研修会講師	2016年2月5日	広島家庭裁判所で「WISC-Ⅳの施行と解釈」という研修会で講師を務めた。研修会では、知能検査の実施方法、活用について講演を行った。
22.社会医療法人社団沼南会沼隈病院での研修会講師	2015年6月29日	社会医療法人社団沼南会沼隈病院で、看護師向けの研

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		修会で講師を務めた。研修会の内容は、プリセプターとして新人看護師にどのように関わるか、カウンセリングの仕方などについて講演を行った。
23.神戸家庭裁判所姫路支部研修会での講師	2015年2月6日	神戸家庭裁判所姫路支部で「神戸家庭裁判所姫路支部研修会－攻撃性について－」の講演を行った。
24.岡山家庭裁判所での研修会講師	2015年1月19日	岡山家庭裁判所で「事例を用いた心理テスト「ＷＩＳＣ―Ⅳ」の解釈」という研修会で講師を務めた。研修会では、知能検査を用いた事例について講演を行った。
25.岡山家庭裁判所での研修会講師	2014年10月31日	岡山家庭裁判所で「事例を用いた心理テスト「ＷＩＳＣ―Ⅳ」の解釈」という研修会で講師を務めた。
26.岡山家庭裁判所での研修会講師	2013年5月31日	岡山家庭裁判所で「WISC-Ⅳの施行と解釈」という研修会で講師を務めた。研修会では、知能検査の実施方法、活用について講演を行った。
27.神戸家庭裁判所姫路支部での研修会講師	2013年2月21日	神戸家庭裁判所姫路支部で「ウェクスラー式知能検査（WISC-Ⅳ)の実施方法、採点手順及び解釈について」という研修会で講師を務めた。研修会では、知能検査を用いた事例についての解釈を行った。
28.神戸家庭裁判所姫路支部での研修会講師	2012年12月10日	神戸家庭裁判所姫路支部で「ウェクスラー式知能検査（WISC-Ⅳ)の実施方法、採点手順及び解釈について」という研修会で講師を務めた。研修会では、知能検査を用いた事例についての解釈を行った。
29.神戸家庭裁判所での研修会講師	2012年11月19日	神戸家庭裁判所で「少年事件の調査におけるウェクスラー知能検査（特にWISC-Ⅳ)の活用について」という研修会で講師を務めた。 研修会では、知能検査の実施方法、活用について講演を行った。
30.広島県神石郡神石高原町の保育士研修会講師	2012年8月4日	広島県神石郡神石高原町の保育士向け研修会、「保護者支援のあり方とその方法」という研修会の講師を務めた。
31.社会医療法人社団沼南会沼隈病院での研修会講師	2012年1月14日	社会医療法人社団沼南会沼隈病院で、看護師向けの研修会で講師を務めた。研修会の内容は、プリセプターとして新人看護師にどのように関わるか、カウンセリングの仕方などについて講演を行った。
32.神戸家庭裁判所での研修会講師	2011年11月14日	神戸家庭裁判所で「少年事件の調査におけるウェクスラー知能検査（特にWISC-Ⅳ)の活用について」という研修会で講師を務めた。研修会では、知能検査の実施方法、活用について講演を行った。
33.広島県神石郡神石高原町の保育士研修会講師	2011年11月5日	広島県神石郡神石高原町で実施された、保育士向けの研修会「発達障害の内容と理解とその対応について」の講師を務めた。
34.教員免許状更新講習の講師	2011年4月～2017年3月	教員免許状更新講習の選択領域「教師のための学校カウンセリング入門講座」の講師を務めた。
35.文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業公開講座のコーディネーターならびに司会	2010年12月4日	文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業の一環として、平成22年度第3回公開講座「子どものソーシャルスキルを育てる理論と実践」のコーディネーターならびに司会を担当した。
36.広島県高等学校教育研究会養護部会福山地区支部研修会講師	2010年1月27日	広島県高等学校教育研究会養護部会福山地区支部の研修会「効果的な教育相談について」の講師を務めた。
37.広島県立福山誠之館高等学校研修会講師	2009年8月18日	広島県立福山誠之館高等学校で実施された研修会「人間関係を円滑にするコミュニケーションの方法」の講師を務めた。
38.岡山県補導(育成)関係者研修会講師	2009年8月5日	岡山県少年補導(育成)連絡会笠岡青少年補導センターの研修会講師を務めた。
39.広島県尾道市教育委員会不登校対策プロジェクト会議でのスーパーバイザー	2009年3月9日	広島県尾道市教育委員会不登校対策プロジェクト会議で不登校対策スーパーバイザーとして，助言および指導を行った。
4 その他		
1.学科総合型選抜・広報ワーキンググループ	2024年4月～現在	学科の総合型選抜・広報ワーキンググループメンバーとなり、総合型選抜の実施方法、評価方法および運営

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		方法などについて検討を行っている。
2.大学1年生の担任	2024年4月～現在	心理学科1年の担任を務めている。
3.学生委員	2024年4月～現在	心理・社会福祉学科（心理コース）／心理学科の学生委員を務めている。
4.広報入試委員	2023年4月～2024年3月	学科の広報入試委員として、学院および学科の入試業務およびオープンキャンパス担当、学科パンフレットの作成等を務めた。
5.大学2年生の担任	2023年4月～2024年3月	大学2年生の担任を務めた。
6.高校生に対する模擬授業の実施	2022年10月23日	姫路市立琴丘高校で心理学についての模擬授業を実施した。
7.学生委員	2022年9月～2023年3月	短期大学部心理・人間関係／心理・社会福祉学科の学生委員を務めた。
8.大学1年生の担任	2022年4月～2023年3月	大学1年生の担任を務めた。
9.大学2年生の担任	2021年4月～2022年3月	大学2年生の担任を務めた。
10.大学1年生の担任	2020年4月～2021年3月	大学1年生の担任を務めた。
11.大学2年生の担任	2019年4月～2020年3月	大学2年生の担任を務めた。
12.広報入試委員	2018年4月～2020年3月	広報入試委員として、学院および学科の入試業務を行った。
13.大学1年生の担任	2018年4月～2019年3月	大学1年生の担任を務めた。
14.大学2年生の担任	2017年4月～2018年3月	大学2年生の担任を務めた。
15.高校生に対する模擬授業の実施	2016年7月21日	兵庫県立宝塚高等学校の生徒に対して，「心理学について－認知・行動面から考える－」というタイトルで模擬授業を行った。
16.大学1年生担任	2016年4月～2017年3月	大学1年生の担任を務めた。
17.高校生に対する模擬授業の実施	2016年2月24日	武庫川女子大学附属高等学校との高大連携授業(心理学)を担当した。
18.短期大学部改革委員(学科)	2015年6月～2016年3月	文学部心理・社会福祉学科短期大学部改革委員を務めた。
19.倫理審査運営委員会委員(学科)	2015年4月～2017年3月	短期大学部人間関係／心理・人間関係学科、文学部心理・社会福祉学科、ならびに大学院文学研究科臨床心理学専攻の倫理審査運営委員会の委員を務めた。
20.倫理審査ワーキンググループ委員(学科)	2015年3月～2016年3月	短期大学部人間関係学科、文学部心理・社会福祉学科、ならびに大学院文学研究科臨床心理学専攻の倫理審査ワーキンググループの委員を務めた。
21.学生委員	2014年4月～2016年3月	短期大学部人間関係／心理・社会福祉学科の学生委員を務めた。
22.「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクト企画実施委員会委員	2013年5月～2014年3月	「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクト企画実施委員会の委員を務めた。
23.大学院の論文指導	2013年4月～現在	大学院生の修士論文作成において、指導教員として論文構成やデータ解析などの指導を行っている。また、副査として論文審査にも関わっている。
24.和歌山大学での非常勤講師	2013年4月～2019年3月	国立大学法人和歌山大学教育学部で発達相談研究の非常勤講師を務めた。
25.学生委員会文化部委員会(常任)	2012年4月～2016年3月	大学・短期大学部の学生委員会文化部委員会(常任)を務めている。
26.福山大学での非常勤講師	2011年9月～2012年3月	学校法人福山大学福山大学人間文化学部で教育相談の非常勤講師を務めた。
27.福山平成大学での非常勤講師	2011年4月～2011年9月	学校法人福山大学福山平成大学看護学部で臨床心理学の非常勤講師を務めた。
28.福山大学での非常勤講師	2010年9月～2011年3月	学校法人福山大学福山大学人間文化学部で教育相談の非常勤講師を務めた。
29.武庫川女子大学発達臨床心理学研究所研究委員	2010年4月～現在	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所研究委員を務めている。
30.学生委員	2010年4月～2012年3月	文学部心理・社会福祉学科の学生委員を務めた。
31.キャンパスガイド編集委員	2010年4月～2011年3月	短期大学部人間関係学科、文学部心理・社会福祉学科、ならびに大学院文学研究科臨床心理学専攻のキャンパスガイド編集委員を務めた。
32.国際交流委員	2009年4月～2010年3月	短期大学部人間関係学科ならびに文学部心理・社会福祉学科の国際交流委員を務めた。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.公認心理師(国家資格)	2020年4月1日～現在	大学および大学院の公認心理師関連科目に関連する資格である。
2.幼稚園専修免許	2013年4月1日～現在	教育心理学(教職)において関係する資格である。
3.小学校専修免許	2013年4月1日～現在	教育心理学(教職)において関係する資格である。
4.学校心理士	2009年4月1日～現在	大学院科目である、臨床心理査定特論Ⅰ、臨床心理実習Ⅰ・Ⅱにおいて関係する資格である。
5.臨床心理士	2009年4月1日～現在	大学院科目である、臨床心理査定特論Ⅰ、臨床心理実習Ⅰ・Ⅱにおいて関係する資格である。
6.保育士	2009年4月1日～現在	乳幼児を対象としたケース、乳幼児を抱える保護者に対する助言・指導、また、保育士資格を取得したい学生に対する指導に関係する資格である。
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.登校しぶりがある小学生の母子並行面接のスーパーヴァイズ	2024年8月～現在	登校しぶりがみられる小学生の母子並行面接のスーパーヴァイズを行っている。
2.不登校傾向児の母子並行面接のスーパーヴァイズ	2024年7月～現在	不登校児童生徒の母子並行面接のスーパーヴァイズを行っている。
3.登校しにくい生徒の母子並行面接のカウンセリング及びスーパーヴァイズ	2024年4月～現在	登校しにくい生徒のケースについて指導及び母親の面接をしている。
4.家庭ならびに学校に悩みがある女子の母親のカウンセリング	2020年10月～現在	家庭ならびに学校に悩みがある女子の母親のカウンセリングを行っている。
5.兄弟関係に悩みがある子どもの母親のカウンセリング	2020年7月～現在	兄弟関係に悩みがある子どもの母親のカウンセリングを行っている。
6.兄弟関係に悩みがある子どものスーパーバイズ	2020年7月～2024年3月	大学院生が担当している兄弟関係に悩みがある子どものケースのスーパーバイズを行っていた。
7.場面緘黙児の母子平行面接のスーパーバイズ	2019年6月～2024年3月	大学院生が担当している場面緘黙児の男子と母親の母子平行面接のスーパーバイズを行っていた。
8.対人関係に悩む女子のスーパーバイズ	2018年5月～2024年3月	大学院生が担当している、対人関係に悩む女子のスーパーバイズを行っていた。
9.中学生女子と母親の母子並行面接のスーパーバイズ	2016年7月～2017年3月	大学院生が担当している，不登校傾向の中学生女子と母親の母子並行面接のスーパーバイズを行っている。
10.小学生男子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2015年5月～2017年3月	大学院生に対して、小学生男子のプレイセラピーのスーパーバイズを行っている。毎回のプレイセラピーの様子から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行った。
11.成人男性に対するカウンセリング	2015年5月～2015年10月	成人男性に対して、カウンセリングを行っている。また、カウンセリングだけでなく、心理検査の結果から現在の状態を説明し、今後の方針について話をしている。
12.小学生男子の母親面接に対するスーパーバイズ	2015年4月～2016年4月	研究生に対して、小学生男子の母親面接のスーパーバイズを行っている。毎回の面接場面から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行っている。
13.小学生男子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2015年4月～2016年4月	研究生に対して、小学生男子のプレイセラピーのスーパーバイズを行っている。毎回のプレイセラピーの様子から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行っている。
14.小学生男子の母親に対するカウンセリング	2013年10月～2013年10月	小学生男子の母親に対して、カウンセリングを行った。家庭および学校での様子を聴き、本児の行動特性を分析し、今後の関わりについて助言を行った。
15.小学生男子の母親に対するカウンセリング	2013年6月～2014年1月	小学生男子の母親に対して、カウンセリングを行った。家庭、学校および学外活動での様子を聴き、本児の行動特性を分析し、今後の関わりについて助言を行った。
16.年長女児の母親に対するカウンセリング	2013年5月～2013年5月	年長女児の行動に不安がある母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、本児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
17.中学生女子の面接に対するスーパーバイズ	2013年2月～2015年3月	修了生に対して、中学生女子の面接のスーパーバイズ

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		を行っている。また、心理検査の指導および、毎回の面接場面から本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行っている。
18.小学生女子の母親に対するカウンセリング	2013年1月～2013年1月	小学生女子の母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、本児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
19.小学生女子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2012年11月～2014年3月	大学院生に対して、小学生女子のプレイセラピーのスーパーバイズを行った。また、心理検査の指導だけでなく、毎回のプレイセラピーの様子から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行った。
20.小学生女子の母親に対するカウンセリング	2012年11月～2014年3月	小学生女子の母親に対して、カウンセリングを行った。また、カウンセリングだけでなく、心理検査の結果から本児の特性を分析し、今後の関わりについて助言を行った。
21.年長女児の母親に対するカウンセリング	2012年9月～2012年10月	年長女児の母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、女児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
22.川西市青少年問題協議会専門委員	2012年8月～2013年3月	兵庫県川西市において、「子ども・若者育成支援推進法」に基づき、様々な関係機関がネットワークを形成し支援していくための方向性を示した「川西市子ども・若者育成支援計画～げんきな若者かわにしプラン～」の作成の委員を務めた。
23.小学生女子の母親に対するカウンセリング	2011年5月～2012年5月	小学生女子の母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、本児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
24.小学生男子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2011年1月～2012年3月	小学生男子に対して、プレイセラピーのスーパーバイズを行った。また、心理検査の実施指導およびプレイセラピーについて指導を行った。その中で、本児の社会的スキル、共感性および協調性が身につけられる事ができる関わり方について指導を行った。
25.小学生男子の母親に対するカウンセリング	2011年1月～2012年3月	小学生男子の母親に対して、カウンセリングを行った。また、カウンセリングだけでなく、心理検査の結果から本児の特性を分析し、今後の関わりについて助言を行った。
26.幼児の母親に対するカウンセリング	2010年7月～2010年7月	幼児の発達に不安がある母親に対して、カウンセリングを行った。その中で、幼児の問題傾向について行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
27.小学生女子のプレイセラピーに対するスーパーバイズ	2009年9月～2010年3月	大学院生に対して、小学生女子のプレイセラピーのスーパーバイズを行った。毎回のプレイセラピーの様子から、本児の行動傾向や会話を分析し、関わり方について指導を行った。
28.小学生女子の母親に対するカウンセリング	2009年9月～2010年3月	小学生女子の母親に対して、カウンセリングを行った。本児の問題傾向について、行動分析を行い、家庭での関わり方について助言を行った。
29.小学生男子に対するプレイセラピー	2009年5月～2012年3月	小学生男子に対して、プレイセラピーを行った。男子の特性に合わせた内容を検討し、社会的スキル、共感性および協調性が身につけられる事を目的としたとプレイセラピーを行った。
30.尾道市広域通信制・単位制高等学校審議会委員	2007年9月～2009年3月	尾道市が平成19年7月に国から構造改革特別区域「尾道市人間教育特区」の認定を受け、市の認可を受けた学校設置会社による学校設置事業が可能となった。この事業により設置された広域通信制・単位制高等学校について審議する審議会委員を務めた。
31.福山市立中学校生徒事案に関する調査委員会委員	2006年12月～2007年5月	福山市教育委員会が設置した、「福山市立中学校生徒事案に関する調査委員会」の委員を務めた。
32.広島県教育委員会青少年の自立支援事業企画運営会議委員	2005年6月～2007年3月	広島県教育委員会が主催する、「青少年の自立支援事業」の企画運営会議委員を務めた。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
1.心理実習主担	2021年4月～現在	公認心理師科目である心理実習の主担として、社会福祉分野の実習施設との連絡調整および西宮市教育委員会の担当者との連絡調整を行った。
2.学科心理コース領域主担	2017年4月～2018年3月	学科心理領域主担として、心理領域の業務の取りとまとめ等を行った。
3.学科心理コース予算担当	2016年4月～2017年3月	学科心理コース予算を担当していた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.発達と臨床の心理学	共	2012年9月	ナカニシヤ出版	本書は、心理的な問題を抱えている人たちを支援するうえで、発達の知識を現実に活かし、臨床心理の専門家ならびに臨床の場で実践する人を養成することを目的としている。また、本書は10章から構成されており、それぞれの章に、事例、発達の背景と臨床的な問題、かかわり方のポイント、発展的課題が設定されている。筆者の担当部分は第10章臨床的アプローチ―認知行動療法に焦点を当てて―(pp.161-175)である。 (編者：渡辺弥生・榎本淳子，分担執筆者：玉木健弘，他20名)
2.教師カウンセラー・実践ハンドブック―教育実践活動に役立つカウンセリングマインドとスキル―	共	2010年12月	金子書房	本書は、学校カウンセリングに関する諸理論を基礎として、教師カウンセラーの教育実践活動に役立つ、カウンセリングマインドとスキルについて解説している。内容は、教育専門職としての資質と力量を高める事について具体的・実践的に説明している。筆者の担当部分は、第5章3認知行動カウンセリング(pp.86-87)である。 (編者：上地安昭，分担執筆者：玉木健弘，他61名)
3.基礎から学ぶ心理学・臨床心理学	共	2009年4月	北大路書房	本書は、心理学、教育心理学ならびに臨床心理学などの基本知識を網羅した著書である。本書は、第Ⅰ部心理学、第Ⅱ部臨床心理学のⅡ部構成からなっており、専門的な心理学および臨床心理学を学べるように構成されている。筆者は、第11章第5節認知行動療法(pp.209-212)を執筆した。 (編者：山祐嗣，小林知博，山口素子，分担執筆者：玉木健弘，他33名)
4.原著で学ぶ社会性の発達	共	2008年3月	ナカニシヤ出版	本書は、発達心理学の領域の中で、社会性の発達に関する研究についてまとめたものである。本書は、9章からなり、社会性および認知に関連する研究がまとめられている。各章で、代表的な研究が3本ほど取り上げられている。担当部分は、第5章セルフ・コントロール5-3攻撃性(p.120-p.1275)である。 (編者：渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎.分担執筆：玉木健弘，他24名)
5.心理学・臨床心理学入門ゼミナール	共	2006年3月	北大路書房	本書は、心理学全般ならびに教育心理学、臨床心理学などについて、学部生および大学院生を対象とした専門書である。心理学全般から臨床心理学の基礎から応用までを学べるように構成されている。筆者の担当は、教育現場で活用されている認知行動療法を執筆した。担当部分は、第Ⅱ部臨床心理学、第19章心理療法の実際、第3節認知行動療法(p.163-p.165)である。 (編者：島井哲志・池見陽．分担執筆：玉木健弘，他35名)
2 学位論文				
1.小中学生の攻撃性がストレス反応へ及ぼす影響に関する心理学的研究―社会的情報処理過程を媒介要因とした因果関係の分析―	単	2004年4月	徳島文理大学大学院博士後期課程学位論文	小中学生が特性的に持っている攻撃性が認知面である社会的情報処理過程と健康面であるストレス反応との影響について共分散行動分析を用いて、因果関係の検討を行った。攻撃性の評価方法として、児童生徒自身が評価する自己評定と教師が評価する教師評定の両方を採用した。それ以外の変数については、自己評定で行った。分析の結果、小中学生ともに、表出性攻撃傾向が高い児童生徒より不表出性攻撃傾向が高い児童生徒の法がストレス反応を示しやすいことが明らかとなった。
3 学術論文				
1.女子大学生の感情的well-being の違いが対人ストレッサー、セルフ・コントロー	単	2024年3月	武庫川女子大学紀要，71，10-17.	本研究は、女子大学生を対象に感情的well-beingの違いによって対人ストレッサーおよびセルフ・コントロールが攻撃性にどのように影響するかを明らかにすることを目的として行った。まず、分散分析を行ったところ、攻撃性の言語的攻撃とセルフ・コントロールの

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
ルならびに攻撃性に及ぼす影響（査読付）				感情・欲求抑制以外で群の主効果が認められた。多重比較を行ったところ、感情well-beingの違いが示された。また、パス解析を実施した結果、感情well-beingの違いによって、対人ストレッサー、セルフ・コントロールが攻撃性に及ぼす影響が異なることが明らかとなった。さらに、感情的well-beingのポジティブ感情が高く、ネガティブ感情が低い群が対人ストレッサーを感じにくいことも明らかとなった。
2.高校生における対人ストレスに及ぼすソーシャルサポートの検討―対人ストレスコーピングを介して―（査読付）	共	2023年3月8日	武庫川女子大学紀要，70，21-29.	本研究は、高校生を対象として、対人ストレスに及ぼすソーシャルサポートの影響を明らかにするために研究を実施した。 まず、学年と性別の違いを検討するために、分散分析を実施した。その結果、認知的評価で、学年の主効果が重要性で認められた。また、対処効力感で性の主効果が認められた。重要性で学年の主効果が認められたため、多重比較を行った。その結果、有意差は見られなかった。対人ストレスコーピングでは、ポジティブ関係コーピングで、学年と性の主効果認められた。また、学年と性の交互作用が見られた。学年の主効果が見られたため、多重比較を行ったところ、有意差が見られた。交互作用も見られたため、単純主効果の検定を行ったところ、男子の1年生と2年生、1年生の男女で差が見られた。次にストレスレベルを高低群に分類し、各群の認知的評価と対人ストレスコーピングの違いについて検討した。その結果、対処効力感と脅威で有意差が見られた。 さらに、パス解析を実施した。分析の結果、ストレス高低群で対人ストレスコーピングで違いがあることが明らかにされた。また、ストレス高低群でソーシャルサポートの違いを分析した結果、群ごとで違いがあることが示された。 （共同研究者：玉木健弘・堺日菜乃（筆頭論文）「担当部分：論文執筆、データ解析」
3.研究倫理審査システムの開発と評価（査読付）	共	2017年3月	武庫川女子大学紀要　人文・社会科学編 64，41-49.	研究倫理に対する意識が，近年高まっている。そして，研究を行う際に研究倫理の申請が必須となってきている。しかし，申請が多くなることで，審査を行うことが増加してきている。そこで，審査を円滑に行うとともに，事務担当者の作業量を軽減することを目的として本研究を行った。 (共同研究者：竹中一平・松村憲一・半羽利美佳・玉木健弘・長岡雅美)「担当部分：審査システムの流れについて検討、申請に必要内容についての検討」
4.中学生用攻撃性質問紙（AQS）の 作成と信頼性、妥当性の検討(査読付)	単	2017年3月	武庫川女子大学紀要　人文・社会科学編　64，51-60.	本研究は、中学生の攻撃性を表出性攻撃ならびに不表出性攻撃の2側面から測定する質問紙を作成することを目的として実施した。質問紙の信頼性、妥当性を検討するため、調査1から調査3を行った。中学1年生から3年生1,683名を対象に実施した。分析の結果、本質問紙は、表出性ならびに不表出性攻撃を測定するにあたり、高い信頼性と妥当性をもつことが明らかにされた。
5.問題行動の発生要因と今後の対応方法(査読付)	単	2014年10月	青少年問題，61，48－53.	本研究は、現代の問題行動の発生要因と今後の対応策について、スクールカウンセラーとしてどのように対応するかを検討した。学校現場で発生する問題行動は多岐にわたる。さらに、発生要因が1つではなく、多数の要因が関連することも多い。そのため、これまでの経験をもとにした検討だけでなく、心理アセスメントなどを用いて、エビデンスベースでも発生要因を検討する必要性を示した。
6.小学生における食生活と学級満足との関連性(査読付)	共	2014年3月	福山大学人間文化学部紀要，14，107-120.	本研究は、小学生を対象に、食生活と学級満足との関連性を検討した。不登校などの問題行動と食生活との関連性について近年研究が行われてきた。その中で、食行動と問題行動との間に関連があることを示唆した研究も見られる。しかし、食事形態と学級満足度との関連性について、検討した研究は少ない。そこで、食生活と学級満足度との関連について調査を行い、問題行動予防について検討を行った。 (共同研究者：野津山希・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」
7.現代青年の家族関係認知と自我同一性および抑うつとの関連	共	2012年4月	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要，13，51-	本研究は、父子関係、母子関係、自我同一性、抑うつの4点についての因果関係を男女別に検討を行った。その結果、男子青年において、父子関係の良好さが自我同一性の確立を促進していることが明

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
（査読付）			56.	らかとなった。女子青年ついては、母親を客観視できることが自我同一性の確立を促進していることが示された。 （共同研究者：八木他恵子・玉木健弘）「担当部分：データ分析」
8.大学生の依存傾向に関する検討－質問紙調査および投影法検査を用いて－（査読付）	共	2011年4月	福山大学こころの健康相談室紀要，5，117-126.	本研究は、大学生を対象に大学生の友人関係において発生する依存性の役割について、質問紙およびTATの反応分析によって明らかにすることを目的とした。その結果、質問紙得点の性差を検討した結果、有意差は認められなかった。次に依存欲求とTAT反応との関連を検討した結果、依存欲求の高い者は、TAT反応の無活動が多く見られた。 （共同研究者：伊垣知美・玉木健弘・樋町美華）「担当部分：論文執筆、データ分析」
9.児童用学校生活の質（QOSL）尺度の作成（査読付）	共	2011年3月	福山大学こころの健康相談室紀要，5，127-134.	本研究は、小学生を対象に児童用学校生活の質(QOSL)尺度の信頼性、妥当性の検討を行った。その結果、5因子が抽出され高い内的整合性が確認された。また、基準関連妥当性を検討するため、教員にアンケートおよび調査を行い、QOSL尺度との相関を検討した結果、高い正の相関が示された。このことから基準関連妥当性が確認された。 （共同研究者：井場朱紗美・玉木健弘・樋町美華）「担当部分：論文執筆、データ分析」
10.幼児期における色彩バウムテストとCBCLの関係(査読付)	共	2010年4月	福山大学こころの健康相談室紀要，4，75-82.	本研究は、保育園児を対象に色彩バウムテストと他者評定であるCBCLを実施し、色彩バウムテストの描画特徴から読み取れる子どもの特徴がCBCLの結果に関係があるかについて検討を行った。その結果、対象者全員のCBCLの各尺度、総得点ともに男女差は見られなかった。次に色彩バウムテストの描画特徴を検討した。その結果CBCL得点低群では、左傾き、花描写なしなどがみられた。CBCL得点高群では、描画位置中央、花、根、地平線、などがみられた。 （共同研究者：道廣倫子・玉木健弘・日下部典子）「担当部分：論文執筆、データ分析」
11.不登校傾向の小中学生が示すPFスタディの特徴について(査読付)	共	2010年4月	福山大学こころの健康相談室紀要，4，35-42.	本研究は、不登校傾向児に対して、PFスタディを用いて日常で起こりうる欲求不満場面での反応パターンを調査し、不登校傾向の児童生徒における特徴を検討することとした。その結果、調査参加者全員及び高低群のGCRの平均値が林(2007)の示す数値より、1SD以上低かったことから、先行研究で報告されているように、不登校児・生徒のGCRの傾向と同様に公的施設に通っている児童生徒のGCRの値も低い傾向にあることが明らかとなった。 （共同研究者：串崎教子・玉木健弘）「担当部分：論文執筆、データ分析」
12.大学生における主張性と対人ストレスの関係について(査読付)	共	2010年3月	福山大学こころの健康相談室紀要，4，9-16.	本研究は、大学生を対象に主張性を質問紙法と投影法(PFスタディ)を用いて測定し、主張性とPFスタディの各指標が対人ストレスにどのように関係しているかを検討した。その結果、主張性と対人ストレスとの関連は、有意な相関は認められなかった。次にPFスタディと対人ストレスとの関連については、自分を守ろうとする率直な反応を強く示す女子は、男子よりも対人ストレスを多く感じていることが示された。 （共同研究者：兎本由香里・玉木健弘・日下部典子）「担当部分：論文執筆、データ分析」
13.小学生における食事バランスと問題行動との関連性(査読付)	共	2009年3月	福山大学こころの健康相談室紀要，3，71-77.	本研究は、小学生を対象に、教師評価および行動観察を行い、児童の問題行動傾向を把握、さらに質問紙調査により食事バランスについて検討した。その結果、児童の食生活の実態として、夕食では主食においてご飯が最も多く、次にカレーライスなどが摂取されていた。主菜において魚が多く、副菜ではお汁やサラダが多く摂取されていることが明らかになった。 （共同研究者：野津山希・玉木健弘）「担当部分：論文執筆、データ分析」
14.幼児期の仲間関係と色彩バウムテストの関係性(査読付)	共	2009年3月	福山大学こころの健康相談室紀要，3，79-86.	本研究は、保育園児を対象に仲間指名調査で保育園児の仲間関係を把握し、仲間指名が多い子と仲間指名が少ない子の色彩バウムテストにおいて、色彩の使用および描画特徴を検討した。その結果、女子は、数人が中心的になって仲間形成を行っていた。このことから、女子はグループ化し仲の良い子と行動する事が示唆された。ま

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				た、男子は特定の子に指名が集中していないことから、状況に応じて仲間関係が変化することを明らかとなった。 (共同研究者：道廣倫子・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」
15.不登校傾向のある小中学生の心理的well-beingと生活時 間との関係性（査読付）	共	2009年3月	福山大学こころの健康相談室紀要，3，63-70.	本研究は、不登校傾向のある小中学生の生活習慣における時間(以下、生活時間)の使い方を調査し、その生活時間が、不登校傾向のある児童生徒の心理的well-beingにどのような影響を与えているかについて検討を行った。その結果、心理的well-beingにおいては、本研究の対象者は、積極的な他者関係を重視している傾向が見られた。また、支援機関や学校に登校することで基本的な生活リズムが整い、登校意欲も少しずつ持ち始めていることが明らかとなった。 (共同研究者：串崎教子・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」
16.不登校児の食事形態について(査読付)	共	2008年3月	福山大学こころの健康相談室紀要，2， 19-26.	近年、不登校児の食事形態について、注目されてきた。しかし、多くの調査が、不登校になっていない児童を対象としたものであった。また、調査方法も質問紙調査が多く見られ、実際の行動についての調査は、ほとんど行われていていない。そのため、不登校や不登校傾向のある児童生徒の食事形態については、不明確な多く見られた。そこで、本研究では、不登校傾向ある児童と寝食を共にし、その中で食事形態を観察した。また、その中で、不登校児童に食事について質問し、食事形態について検討を行った。 (共同研究者：野津山希・玉木健弘)「担当部分：論文執筆、データ分析」
17.スクールカウンセラーによる訪問面接の効果についての検討(査読付)	単	2008年3月	福山大学人間文化学部紀要，8,107-115.	不登校児童生徒は、行事の場合でも学校へ登校することが困難な場合が多い。しかし、不登校支援の多くは学校内で行われる。そのため支援対象者が児童生徒ではなく、保護者になる場合が多くなる。不登校支援の中で、保護者への支援は、保護者自身の支援と間接的に児童生徒への支援につながることもあり、重要なものである。しかし、本人と会うことで、直接支援をすることも必要である。そのため、本研究では、登校することが困難な生徒を対象に、訪問面接を行い、訪問面接による不登校支援の効果について検討を行った。
18.大学生による不登校支援についての検討(査読付)	単	2007年3月	福山大学こころの健康相談室紀要，1,43-49.	学校現場で不登校は、長年問題となっている。これまでの不登校支援は、スクールカウンセラーや教員による支援が多く行われてきた。しかし、中学生との考え方や関わり方などの面で、支援が不十分になることも考えられた。そこで、本研究では、不登校傾向のある児童生徒を対象としたキャンプに、小中学生と年齢が近い大学生が学生サポーターとして参加し、不登校児童生徒への支援の効果について検討した。
19.小中学校における特別支援教育についての検討(査読付)	単	2007年3月	福山大学人間文化学部紀要，7，93-102.	小中学校で特別支援教育が本格的に行われるようになった。しかしながら、特別支援教育について、教職員の理解は、充分とは言い難い。さらに、小中学校でも取り組みや特別支援教育への意識の違いが見られる。そこで、本論文では、小中学校での特別支援教育についての取り組みの違いを検討し、効果的な特別支援教育の実施について検討を行った。
20.発達障害児をかかえる母親への臨床心理学的援助(査読付)	単	2006年3月	福山大学人間文化学部紀要，6，53-62.	近年、発達障害児に対する法律ができ、福祉や教育分野で様々な施策が行われるようになった。しかしながら、実際に子どもと関わる時間が多い家族、特に母親への援助は、十分だとはいえない状況にある。そこで、発達障害児をかかえる母親に対して、臨床心理学的な視点から母親を援助し、子どもならびに家族に対してよりより支援について考えた。母親に対する支援は、月1回、カウンセリングを行い、精神面でのストレス低減をはかるとともに、今後の方針について話を聞き、今できることは何かを検討し、見通しを立てた。
21.中学生の攻撃性，社会的情報処理過程ならびにストレス反応の関連性(査読付)	共	2004年8月	学校保健研究，46，242-253.	中学生を対象とし、攻撃性を表出しやすい生徒と表出しにくい生徒の社会的情報処理過程(認知過程)ならびにストレス反応への影響について検討した。攻撃性については、暴力や暴言など攻撃行動を表出しやすい攻撃性を表出性攻撃、攻撃行動を示さない攻撃性を不表出性攻撃に分類した。社会的情報処理過程については、Dodgeらが提唱した円環モデルを用いた。また、因果関係の検討については、共

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				分散構造分析を行った。その結果、表出性および不表出性攻撃が高い生徒は、ストレス反応を示しやすいことが明らかとなった。 (共同研究者：玉木健弘・山崎勝之)(筆頭論文)「担当部分：論文執筆、データ分析」
22.小学生用攻撃性質問紙(GAQC)の作成と信頼性および妥当性の検討（査読付）	共	2003年9月	徳島文理大学研究紀要，66，19-26.	小学生の攻撃性を表出性攻撃ならびに不表出性攻撃に分類する質問紙の作成を試み、信頼性および妥当性の検討を行った。また、この質問紙は、小学校教諭よって評価されるものである。被評定者は、小学生1,404名を対象とした。本質問紙の分析の結果、まず、信頼性については、α係数および再検査法において高い数値を示した。次に妥当性については、因子的妥当性ならびに基準関連妥当性についても問題がないことが示された。このことから、本質問紙は、高い信頼性および妥当性を有した質問紙であることが明らかとなった。 (共同研究者：玉木健弘・山崎勝之・松永一郎)(筆頭論文)「担当部分：論文執筆、データ分析」
23.小学生における攻撃性が社会的情報処理に及ぼす影響(査読付)	単	2003年3月	犯罪心理学研究，41，1-15.	小学生を対象とし、攻撃性を表出しやすい児童と表出しにくい児童の社会的情報処理過程(認知過程)の違いについて検討した。攻撃性については、暴力や暴言など攻撃行動を表出しやすい攻撃性を表出性攻撃、攻撃行動を示さない攻撃性を不表出性攻撃に分類した。社会的情報処理過程については、Dodgeらが提唱した線型モデルを用い、第1段階から第5段階までについて調査を行った。また、因果関係の検討については、共分散構造分析を行った。その結果、表出性攻撃傾向のある児童は、他人の意図と悪意意図帰属しやすいことが示された。
24.中学生用攻撃性質問紙教師版(AQS-T)の作成と信頼性および妥当性の検討（査読付）	共	2002年10月	徳島文理大学研究紀要，64，7-14.	中学生の攻撃性を表出性攻撃ならびに不表出性攻撃に分類する質問紙の作成を試み、信頼性および妥当性の検討を行った。また、この質問紙は、中学校教諭よって評価されるものである。被評者は中学生716名を対象とした。本質問紙の分析の結果、まず、信頼性については、α係数および再検査法において高い数値を示した。次に妥当性については、因子的妥当性ならびに基準関連妥当性についても問題がないことが示された。このことから、本質問紙は、高い信頼性および妥当性を有した質問紙であることが明らかとなった。 (共同研究者：玉木健弘・山崎勝之・松永一郎)(筆頭論文)「担当部分：論文執筆、データ分析」
その他				
1．学会ゲストスピーカー				
1.第3回近畿認知療法・認知行動療法学会	共	2022年3月	近畿認知療法・認知行動療法学会	第3回近畿認知療法・認知行動療法学会のテーマは、「他職種による認知行動療法を考える」であった。この学会の教育講演の講師を担当し、「他職種協働に役立つ心理療法の基本」というタイトルで講演を行った。 （企画者：髙橋良斉．教育講演講師：玉木健弘 ）
2.一般社団法人 公認心理師の会2021年度年次総会教育・特別支援部会シンポジウム	共	2021年11月	一般社団法人 公認心理師の会	公認心理師が活動する教育場面は、初等教育から高等教育まで幅広い教育段階に渡って存在している。本シンポジウムでは、それぞれの現場で活躍されている公認心理師の先生方による話題提供から、活動の実際や公認心理師としての役割・今日的課題について理解を深めた。指定討論・全体討論では、各教育段階の特色や連続性を踏まえつつ、クライエントの中長期的な成長や自立を見据えた支援のあり方について議論した。 （企画者：戸ヶ崎恭子・佐々木恵．話題提供者：玉木健弘　他2名）
3.青少年の攻撃性は変化したか	共	2008年10月	日本犯罪心理学会第46回大会	攻撃性にまつわる議論は、これまで犯罪心理学領域において絶えずテーマとなってきた。また、犯罪領域において本題に関連すると思われる凶悪犯や粗暴犯は、近年、量的にさほど増加しているわけではない。しかし、非行臨床の現場で取り扱う個々のケースは一昔前と比べて青少年の心像に少し何かが変化しているように思えるという声が実務家の中にある。このような変化について本シンポジウムにおいて議論した。また、本シンポジウムで高校生の攻撃性について、調査研究から得られた知見を報告した。 (企画者：福本浩行．話題提供者：玉木健弘　他2名)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
1.中学生における援助要請経験と利益・コストの関連 ―援助要請経験の認識の違いに着目して―	共	2024年9月	日本教育心理学会第 66 回総会	本研究では、相談してよかった、相談しない方がよかったという援助要請経験に対する認識の違いに着目して検討を行った。相談要請経験を5つに分類し、被援助志向性および相談行動の利益・コストの違いについて分析を行った結果、相談してよかったと思った生徒がポジションな結果となった。また、否定的な経験をした事については、相談しない方がよかった生徒が相談してよかったと思った生徒より高い得点を示した。 （共同研究者：奥穂波・玉木健弘 ）
2.中学生の攻撃性と抑うつおよび学校不適応傾向との関連	共	2024年9月	日本教育心理学会第66 回総会	本研究では、中学生を対象に、攻撃性と抑うつおよび学校不適応傾向との関連について検討を行った。その結果、抑うつで性の主効果、学校不適応傾向で性および学年で主効果が認められた。また、パス解析を行ったところ攻撃性から抑うつ、攻撃性から学校不適応傾向、さらに攻撃性、抑うつ、学校不適応傾向において正の影響が示された。 （共同研究者：笹谷愛望・玉木健弘 ）
3.就労者における先延ばし傾向、時間管理能力、睡眠時間 および精神的健康との関連性	共	2024年8月	日本心理臨床学会第43回大会	睡眠習慣とうつ病との関係性においては、先延ばしもうつ病と関連する要因の一つであると指摘されている。そのため、先延ばしとうつ病、あるいは、精神的健康との関連を調査することが必要だと考えられる。これまでは、大学生においての先延ばし研究が多く実施されているが、就労者を対象とした先延ばし研究は少なく、先延ばし傾向や時間管理能力、睡眠時間、精神的健康との関連は明らかになっていない。そこで、本研究では職種ごとに先延ばし傾向、時間管理能力、睡眠時間および精神的健康との関連性について検討した。 （共同研究者：道満結香・玉木健弘 ）
4.就労者のヘルスリテラシーが 時間管理及びメンタルヘルスに及ぼす影響	共	2023年9月	日本心理臨床学会第42回大会	本研究では就労者の健康を維持していく力を高める要因について明らかにし、時間管理とメンタルヘルスとの関係性について検討した。調査対象者は、企業に勤める就労者25名(男性17名、女性8名)を対象に実施した。性と睡眠時間について検討するため、精神的健康、時間管理、抑うつに耐える力、先延ばし傾向の各下位尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を実施した。分析の結果、性別では、うつ傾向で主効果が見られ、睡眠時間では、時間の見積もりで主効果が見られた。さらに、交互作用も見られたため、単純主効果の検定を行った。その結果、「時間の見積もり」が有意となり、女性で睡眠時間低群では高群より時間を見積もりやすいことが明らかになった。 （共同研究者：道満結香・玉木健弘 ）
5.高校生の攻撃性と抑うつおよび学校不適応傾向との関連	共	2023年8月	日本教育心理学会第65回総会	本研究は、高校生を対象に、攻撃性と抑うつおよび学校不適応傾向との関連について検討を行うことを目的として検討を行った。調査対象者は，私立高等学校の生徒693名であった。性差および学年差異について検討するため、分散分析を行った。その結果、抑うつと学校不適応傾向が学年の上昇に伴い高くなる傾向が見られた。また、抑うつと学校不適応のいずれも男子より女子で高いことも示された。そして、パス解析の結果、攻撃性から抑うつを媒介して学校不適応傾向に影響を及ぼし、さらに、攻撃性が学校不適応傾向に影響を及ぼす可能性があることが示唆された。また、攻撃性よりも抑うつが学校不適応傾向に及ぼす影響が大きいことが明らかとなった。 （共同研究者：笹谷愛望・玉木健弘 ）
6.中学生における能動的援助要請者と受動的援助要請者の 援助要請行動の効果の比較	共	2023年8月	日本教育心理学会第65回総会	本研究は、中学生を対象として、援助評価と学校適応感の観点から援助要請行動の効果を検討した。能動的援助要請者と受動的援助要請者で援助評価に差があるか検討するため、分析を行った。その結果、全ての下位尺度得点において、有意差はみられなかった。 KH Coderによる共起ネットワーク分析を行った。その結果、援助要請者は身近な存在である友人への相談が多く、学習面や進路面の悩みが多いこと、非援助要請者では援助者に迷惑をかけたくない、自分で解決すべきであるという考えをもつ生徒が多いことが明らかになった。 （共同研究者：奥穂波・玉木健弘 ）
7.表現力を育む保育実	共	2019年10月	中国四国心理学会	本研究は、子ども一人ひとりの表現力を育み、自分の思いだけでな

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
践			第75回	く、他児の考えや気持ちを理解できるような保育実践を行った。今回の実践では、「実践の中で予想される子どもの行動変化」での予想とほぼ同様の行動が観察された。このことから、自分なりの表現力を育成することで、子どもが変化する事が示唆された。 （共同研究者：岡本京子・玉木健弘 ）
8.高校生における目標志向性と自己肯定感が無気力感に及ぼす影響	共	2019年9月	日本教育心理学会第61回総会	本研究は、自己肯定感と目標志向性が無気力感におよぼす影響について検討を行った。分析の結果、評価されることや相手の言動に対して過敏である傾向は、自己に対する理解が不明瞭であることや日常の疲れを増加させることが明らかになった。一方、「自己受容」および「自己実現的態度」が「他者不信・不満足」を抑制する傾向がみられたことについて、自身に肯定的であり、物事に意欲的に取り組む姿勢は、孤独感や他者に対しての不信感、疲労感を減少させることが明らかになった。 （共同研究者：田中優子・玉木健弘 ）
9.中学生の学校ストレスが学校享受感と攻撃性に及ぼす影響とストレスコーピングについての検討	共	2019年9月	日本教育心理学会第61回総会	本研究では、学校ストレッサーが攻撃性と学校享受感に及ぼす影響を検討することに加えて、学校ストレッサーに対してのストレスコーピングについて検討を行った。分析の結果、ストレスコーピングの中でも、「思考の肯定的変換」を行うことが学校享受感を高めることに繋がることが明らかとなった。 （共同研究者：小谷優花・玉木健弘 ）
10.中学生の自己意識、同調傾向ならびに被異質視不安がいじめ加害傾向に与える影響	共	2019年9月	日本教育心理学会第61回総会	本研究では、個人的要因として自己意識、対人的要因として同調行動、被異質視不安・異質拒否傾向を用いて、いじめ加害傾向にどのような影響があるのかについて検討した。分析の結果、男子において無視などの関係性いじめは、友人と同じことをしたいという心理で生じるが、女子においてからかいやひやかしなどの直接的ないじめについては、自分の意思に反してまで友人に合わせた行動はしないということが明らかになった。 （共同研究者：岡本唯・ 玉木健弘 ）
11.幼児期における集団での協調性を育てるための保育	共	2018年10月	中国四国心理学会第74回	本研究では、協調性を身につける保育実践を検討した。保育実践の結果、、活動内容を理解させることで、協力した活動を行う事が明らかとなった。このことから、他児との協調性を育成するためには、①活動内容の理解、②他児との役割分担、③保育者の支援、④活動の繰り返し、⑤活動内容の振り返り、⑥保育者の支援内容の振り返り、が必要だと考えられる。 （共同研究者：岡本京子・玉木健弘 ）
12.適応指導教室に通う不登校生徒へのSSTとセルフモニタリングを用いた心理教育プログラムの検討― 主張的行動に焦点をあてて ―	共	2017年11月	日本心理臨床学会第38回大会	本研究では社会的スキルの一部である主張的行動を促進するため、SSTとセルフモニタリングを用いた心理教育プログラムを作成し、効果の検討を行うことを目的とした。質的検討から生徒の実感や認識と指導員の評価にズレがあることが明らかになった。 （共同研究者：青垣裕子・玉木健弘 ）
13.生涯学び続ける力を育てるために― 子どもの言葉（会話）からの分析 ―	共	2017年11月	中国四国心理学会第73回	本研究は、発達に遅れがある幼児への関わり方および他児とのトラブルを減少させる保育の検討を行った。保育場面からの行動観察をした結果、A子の会話の特徴は，独り言や相手の発話の繰り返しが多いことが明らかとなった。 （共同研究者：松尾真理・玉木健弘 ）
14.幼児期における協調性を育てるための集団遊びの保育実践	共	2017年11月	中国四国心理学会第73回	本研究は、幼児期における協調性を育てるための集団遊びの保育実践について調査を行った。今回の実践を通して、集団での活動を楽しめることが増えただけでなく、日常の生活の中でもクラスの幼児で協力して物事を行う回数が多く見られるようになった。 （共同研究者：岡本京子・玉木健弘 ）
15.高校生における社会的スキルならびに主体性が生活充実感に及ぼす影響	単	2017年9月	日本犯罪心理学会第55回大会	本研究は、高校生の社会的スキルと主体性が生活充実感に及ぼす影響について検討を行った。その結果、社会的スキルと主体性が生活充実感に影響を及ぼすことが明らかとなった。
16.高校生のセルフ・コントロールがインターネット依存傾向	共	2016年10月	日本教育心理学会第58回総会	本研究は、高校生のセルフ・コントロールがネット依存傾向を媒介して学校適応感に及ぼす影響を検討した。分析の結果、セルフ・コントロールがネット依存傾向を媒介して学校適応感に影響を及ぼす

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
および学校適応感に及ぼす影響				ことが明らかとなった。（共同研究者：東野美佐子・玉木健弘 ）
17.女子大学生の自尊心が自己制御ならびに対人ストレッサーに及ぼす影響	単	2016年10月	日本教育心理学会第58回総会	本研究は、女子大生の自尊心、自己制御，ならびに対人ストレッサーにおよぼす影響について検討を行った。その結果、自尊心、自己制御が対人ストレッサーに影響を及ぼしていることが明らかとなった。
18.ポジティブ・イリュージョンが怒り感情に及ぼす影響	共	2016年9月	日本犯罪心理学会第54回大会	本研究は、大学生を調査対象として研究を行い、自己の能力を過剰に評価する傾向であるポジティブ・イリュージョンが怒りやすさに及ぼす影響を検討した。分析の結果、ポジティブ・イリュージョンが怒りやすさに影響があることが明らかとなった。（共同研究者：藤村真美子・玉木健弘）
19.女子大学生における感情的Well-beingが自己制御および攻撃性に及ぼす影響	単	2016年9月	日本犯罪心理学会第54回大会	本研究は、女子大学生を対象に、感情的Well-beingが自己制御および攻撃性に及ぼす影響について検討を行った。分析の結果、3変数間それぞれで有意差が示され、影響があることが明らかとなった。
20.The effects of aggression on mental health in female undergraduate students	単	2016年7月	31st International Congress of Psychology	The aim of this study was to investigate the effects of aggression on mental health of female undergraduate students. Two hundred ninety students answered a questionnaire and results showed that there were significant effects of expressive and inexpressive aggressions on their mental health.
21.両親の夫婦間葛藤が女子大学生の対人方略に及ぼす影響―P-Fスタディを用いて―	共	2015年9月	日本心理臨床学会第34回大会	現代の子どもたちは対人関係能力や対人関係を円滑に運ぶためのスキルを育むことが困難になっている 。その原因の一つとして親の夫婦関係が挙げられている。夫婦関係が良好である場合、子どもは攻撃的な対処行動をとらないといった夫婦の関係性と子どもの対人方略に関するこれまでの先行研究を支持している。しかし、夫婦関係が良好でない場合、母親と子どもが強く結びつき、子どもの発達や成長に良い結果をもたらすとする報告もあり、一貫した結果は得られていない。そこで本研究では、女子大学生を対象に両親の夫婦間葛藤が対人方略に及ぼす影響について検討を行った。 （共同研究者：海本久恵・玉木健弘）
22.女子大学生の攻撃性が社会的情報処理ならびに精神的健康におよぼす影響の検討	単	2012年11月	日本教育心理学会第54回総会	本研究は、女子大学生の各攻撃性と社会的情報処理過程ならびに精神的健康の因果関係を測定するために共分散構造分析を行った。その結果、表出性攻撃から社会的情報処理過程をへて精神的健康に有意なパスが見られたのは、身体的症状、不安と不眠、うつ傾向であった。不表出性攻撃から社会的情報処理過程をへて精神的健康に有意なパスが見られたのは、不安と不眠、うつ傾向であった。
23.学級風土が児童の思いやり行動に与える影響	共	2012年11月	日本教育心理学会第54回総会	本研究は、学級の雰囲気を捉える指標として学級風土を用いて、学級風土が児童の思いやり行動に与える影響について明らかにすることを目的した。今回の研究結果から、児童の思いやり行動に強い影響力を持っている学級風土は、「意欲・親和」と「学習志向性・規律正しさ」の2因子であることが示された。特に、「意欲・親和」は、児童の思いやり行動のすべてに影響を与えており、児童の思いやりを育みやすい学級環境の中核をなすものであると考えられる。「意欲・親和」といった学級風土が児童の思いやり行動に影響を与える理由として、児童同士の仲が良いだけでなく、教師と児童の間に信頼関係が築かれた学級環境では、教師が思いやり行動のモデルとなり児童の思いやり行動が促進されやすくなったと推測された。 （共同研究者：近田悠香・玉木健弘）
24.小学校における心理的居場所感の検討―自己受容との関連を通して―	共	2012年11月	日本教育心理学会第54回総会	本研究は、相談相手に対する心理的居場所感の性差および学年差の検討、また心理的居場所感が自己受容にどのような影響を与えているかを検討することを目的とした。分析の結果、「安心感」「役割感」「被受容感」のすべてが「自己理解」に有意な標準偏回帰係数を示し、また「被受容感」のみ「自己承認」にも有意な標準偏回帰係数を示した。このことから、「安心感」「役割感」「被受容感」は自己受容感の中でも自分自身を理解するという要因に影響を与え、「被受容感」のみ 自分自身を受け入れるという要因にも影響を与えていることが明らかとなった。 （共同研究者：竹田優子・玉木健弘）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
25.幼児におけるWISC-ⅣとDAMに関する比較研究	単	2012年9月	日本心理臨床学会31回大会	本研究は、保育園児を対象にWISC-ⅣとDAMの結果を比較し、多面的に知能の検討を行った。まず、WISC-Ⅳで算出されたFSIQおよび各指標とDAMIQについて検討を行った。その結果、FSIQがDAMIQより高い値を示したのは7名、VCIがDAMIQより高い値を示したのは8名、PRIがDAMIQより高い値を示したのは9名、WMIがDAMIQより高い値を示したのは8名、PSIがDAMIQより高い値を示したのは7名であった。次に、FSIQの上位下位、各2名のDAMIQについて検討した。その結果、すべての対象者でFSIQがDAMIQより高い値を示した。このことから、WISC-Ⅳで算出されるFSIQ は、DAMIQより高い可能性が示唆された。
26.現代青年の家族関係認知と自我同一性および抑うつとの関連	共	2011年9月	日本心理臨床学会第30回大会	本研究では、母子関係、父子関係、自我同一性、抑うつの4点の因果関係を男女別に検討した。現代青年の特徴をとらえるために、各因子得点を従属変数としてt検定を行い、性差を検討した。その結果、父親からの独立、母親への服従、母親からの独立において、女性が男性よりも有意に高かった。このことから、現代の男子青年において、父子関係の良好さが自我同一性の確立を促進していることが明らかとなった。女子青年においては、母親を客観視できることが自我同一性の確立を促進していることが示された。 （共同研究者：八木他恵子・玉木健弘）
27.幼児における知能と発達との関連性についての検討（2） －WISC-ⅢおよびDAMを用いて－	単	2011年9月	日本心理臨床学会第30回大会	本研究では、簡便に実施ができ、なおかつ多面的に知能を測定する方法を検討するため、WISC-ⅢとDAMを用いて、幼児の知能および発達との関連について調査を行った。まず、DAMで算出されたIQとWISC-Ⅲで算出されたIQについて検討を行った。その結果、DAMで算出されるIQは、WISC-Ⅲで算出されるIQより高い値を示す可能性が示唆された。次に、精神年齢がIQに及ぼす影響についての検討した結果、生活年齢と精神年齢の差が大きい者は、低いIQを示す可能性が明らかとなった。
28.特別支援教育における心理職による教師支援のあり方について－発達障害児と関わる教師の困難感と特性被援助志向性に着目して－	共	2011年9月	日本心理臨床学会第30回大会	本研究は、困難感と被援助志向性の2つの教師の特徴が、心理職に期待する役割にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的として研究を行った。本研究の結果から、新任教師は援助に対する肯定感の高さが、ベテラン教師では援助に対する抵抗感の低さが、心理職への期待を高める上で重要な変数であることが示唆された。 （共同研究者：内藤聡子・玉木健弘）
29.児童用学校生活の質（QOSL）尺度の作成－信頼性および妥当性の検討－	共	2011年9月	日本心理学会第75回大会	本研究は、小学生を対象に児童用学校生活の質(QOSL)尺度の信頼性、妥当性の検討を行った。その結果、5因子が抽出され高い内的整合性が確認された。また、基準関連妥当性を検討するため、教員にアンケートと調査を行い、QOSL尺度との相関を検討した結果、高い正の相関が示された。このことから基準関連妥当性が確認された。 （共同研究者：井場朱紗美・玉木健弘・樋町美華）
30.Examination of Aggressiveness in Middle and High School Students.	単	2011年8月	国際犯罪学会第16回世界大会	本研究は、中学生と高校生の攻撃性の比較を行い、発達段階の違いにおける攻撃性の差異について検討を行った。まず、発達段階の違いを検討するため、中学1年生から高校3年生における各攻撃性の平均値の比較を行った。その結果、表出性および不表出性攻撃ともに中学1年生で最も高い値が示された。特に表出性攻撃では、発達段階が上がるにしたがって攻撃性平均値が減少していくことから、発達段階との関連が高いことが示唆された。
31.The Effects of Relationships between Family Cohesion on Social Skills and Aggression in Elementary School Children.	共	2011年8月	国際犯罪学会第16回世界大会	本研究は、小学生370名を対象とし、家族凝集性が社会的スキルおよび攻撃性に与える影響について検討することを目的とした。その結果、家族にまとまりがあると感じている場合は、望ましい社会的スキルの獲得や、引っ込み思案行動、攻撃行動などが抑制される可能性が示唆された。また、各攻撃性に影響する社会的スキルには違いがあり、攻撃性の違いによって異なる種類の社会的スキルを獲得することが必要であると思われる。 （共同研究者：野津山希・玉木健弘）
32.幼児における社会生活能力と問題行動との関連についての検討	共	2011年3月	日本発達心理学会第22回大会	本研究では、実施が簡便な検査を用いて、個別指導計画の資料となる幼児の社会生活能力および問題行動との関連について検討を行った。社会生活能力と問題行動について、各群での差異を検討するためKruskal-WallisのH検定を行った。その結果、問題行動について

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				は、身体的訴え、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、攻撃的行動で有意差が見られた。 （共同研究者：玉木健弘・野津山希）
33.発達リスク児における知能及び行動の特徴	共	2011年3月	発達心理学会第22回大会	本研究は、WISC-ⅢとCBCLを用いて知能や認知、情緒や行動などの発達リスク児の特徴を、非発達リスク児との比較から明らかにすることを目的とした。分析の結果、WISC-ⅢとCBCLの結果に対して、リスク群と非リスク群における差を検討するためにt 検定を行った。その結果、WISC-Ⅲでは、IQと群指数、下位検査のすべてにおいて、リスク群と非リスク群との間に有意差は見られなかった。 （共同研究者：野津山希・玉木健弘）
34.高校における攻撃性とストレッサーとの関連性についての検討	単	2010年9月	日本心理学会第74回大会	これまで高校生を対象とした、攻撃性とストレッサーとの関連についての研究は数少なかった。そこで本研究では、高校生における攻撃性とストレッサーとの関連について検討し、攻撃性とストレッサーとの関係を明らかにすることを目的とした。各攻撃性と各ストレッサーとの関係を検討するために、共分散構造析行った。分析の結果、各攻撃性と各ストレッサーとの関連については、攻撃性の違いに関係なく、ストレッサーに強い影響を与えることが明らかとなった。
35.巡廻発達相談による発達リスク児に対する支援	共	2010年3月	日本発達心理学会第21回大会	本研究は、巡廻発達相談による発達にリスクを抱えた子どもに対する支援の在り方について検討を行った。調査の結果、巡廻発達相談を通じて、リスクを抱えた子どもの就学を含めた早期支援に繋がる可能性が示唆された。しかしながら、今回の調査における相談員の役割は、発達にリスクを抱えた子どもと保育士との関わりが主であり、保護者への支援は充分とはいえなかった。このことから、子どもと一番身近におり、関わる機会のある保護者に対する支援が今後必要となってくると思われる。 （共同研究者：野津山希・玉木健弘）
36.幼児における気になる子どもの行動と知能との関連性	単	2010年3月	日本発達心理学会第21回大会	本研究は、保育士が「気になる子ども」と感じる子どもの特徴について明らかにするため、子どもの行動と知能の関連について検討した。対象児の行動面について検討するため、CBCLにおける各因子の素点を標準得点に変換し分析を行った。その結果、行動面については、社会性と注意に何らかの課題がある子どもは、保育士が「気になる子ども」と感じていることが示された。このことから、保育士が「気になる子ども」は、知的な遅れはないが、行動については、「社会性」および「注意」に課題がある子どもであることが示された。
37.高校生における攻撃性が社会的情報処理に及ぼす影響	単	2009年8月	日本心理学会第73回大会	本研究は、高校生の攻撃性が社会的情報処理に及ぼす影響を検討し、攻撃性と社会的情報処理の関係を明らかにすることを目的とした。個別場面について、攻撃性から社会的情報処の第2段階へのパスについて、有意な負の関連を示した。集団場面の結果についても、個別場面とほぼ同様の結果となった。以上の分析の結果、攻撃性と社会的情報処理との関係は、個別場面と集団場面で違いがあることが示された。
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.高等教育における学生支援：予防的介入から治療的介入まで	共	2015年9月	日本心理学会第79回大会	日本心理学会第79回大会で「高等教育における学生支援：予防的介入から治療的介入まで」の指定討論者を行った。
2.児童養護施設女児の外来プレイセラピー―大学附設相談室における臨床心理実践(その2)―	共	2015年9月	日本心理臨床学会第34回大会	日本心理臨床学会第34回大会で「児童養護施設女児の外来プレイセラピー―大学附設相談室における臨床心理実践(その2)―」の指定討論者を行った。
3.大学附設相談室における臨床心理実践(そ	共	2014年8月	日本心理臨床学会第33回大会	日本心理臨床学会第33回大会で、「大学附設相談室における臨床心理実践(その1)―父子並行面接の事例を中心に―」の指定討論者を

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
の1)―父子並行面接の事例を中心に―				行った。
4.発達領域における攻撃研究の新展開(3)－暴力やいじめの予防と矯正を実現する介入研究－	共	2009年8月	日本心理学会第73回大会	日本心理学会第73回大会において、「発達領域における攻撃研究の新展開（３）―暴力やいじめの予防と矯正を実現する介入研究―」の企画を行った。
5.発達領域における攻撃研究の新展開（２）　－健康・適応との関連をみる－	共	2008年9月	日本心理学会第72回大会	日本心理学会第72回大会において「発達領域における攻撃研究の新展開（２）―健康・適応との関連をみる―」の企画および司会を行った。
6.発達領域における攻撃研究の新展開 －いじめ問題を意識して最新の関係性攻撃研究をみる－	共	2007年9月	日本心理学会第71回大会	日本心理学会第71回大会において、「発達領域における攻撃研究の新展開 ―いじめ問題を意識して最新の関係性攻撃研究をみる―」の企画および司会を行った。
６．研究費の取得状況				
1.高等教育におけるメンタルヘルス対策の検討：「留学生30万人計画」を見据えて	共	2015年7月～2016年3月	国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学	本研究では、未だに取り組まれていない、複数の高等教育機関にまたがったメンタルヘルス調査を出発点として、具体的なメンタルヘルス支援のあり方を検討することを目的としている。 (共同研究者：佐々木恵・玉木健弘)
2.女子大学生の認知および攻撃性が精神的健康におよぼすメカニズムの解明	単	2015年7月～2016年3月	武庫川学院科研費学内奨励金	認知および攻撃性が精神的健康に及ぼす影響について、これまで女子大学生を中心とした研究は、あまり行われてこなかった。そこで、本研究では、女子大学生の心理的・精神的な問題について検討し、攻撃性がおよぼす影響について検討する。
3.高等教育における学生のメンタルヘルス支援のあり方に関する検討：「留学生30万人計画」を見据えて	共	2015年6月～2016年3月	公益財団法人　メンタルヘルス岡本記念財団	本研究では、複数の高等教育機関にまたがり、日本人学生・留学生、学部生・大学院生、その他の大学生の特性間で比較対照が可能なメンタルヘルスに関するデータを収集し、今後のメンタルヘルス支援のあり方について検討することを目的とする。 (共同研究者：佐々木恵・玉木健弘)
4.コンサルテーション・リエゾンを活用した相談・支援体制の検討	単	2013年7月～2014年3月	武庫川学院科研費学内奨励金	本研究の目的は、保育現場に対して、複数の専門家が連携して支援対象者に対応するコンサルテーション・リエゾンの概念を活用することにより、潜在的に発達の問題を有する、いわゆる「気になる子」への支援体制を見直し、効果的な保育支援を図る方法を確立すること、およびその方法の妥当性を検討した。
5.女子大学生の認知および攻撃性が精神的健康に及ぼす影響についての検討	単	2011年7月～2012年3月	武庫川学院科研費学内奨励金	本研究の目的は、女子大学生の精神的健康な問題について検討し、認知が攻撃性と精神的健康におよぼす影響について検討を行った。精神的健康に負の影響を与えられやすいのは、攻撃性を表に出しやすい人より、攻撃性を表に出しにくい人であることが示唆された。以上の結果から、攻撃性の中でも怒り感情を表出しにくい攻撃性である不表出性攻撃が、精神的健康に悪影響を与えることが明らかとなった。

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2024年3月～現在	こども参加条例検討部会部会長
2.2022年4月～2023年3月	川西市黒川里山センター及び知明湖キャンプ場指定管理者選定委員会委員
3.2021年12月～現在	川西市子ども・若者未来会議副委員長
4.2020年7月～2022年6月	西宮市いじめ問題調査第3者委員会副委員長
5.2017年6月～2021年5月	川西市青少年問題協議会専門委員会委員長
6.2016年5月～2019年3月	岡山県警察本部非行防止対策研究会コーディネーター
7.2015年3月～現在	西宮市スクールカウンセラースーパーバイザー
8.2015年2月～2023年3月	西宮市いじめ防止等対策委員会副委員長
9.2012年4月～現在	神戸市教育委員会スクールカウンセラー
10.2012年4月～2016年3月	兵庫県臨床心理士会　司法・法務・警察領域委員会事務局
11.2010年8月～2011年9月	国際犯罪学会第16回世界大会準備委員
12.2005年4月～2009年3月	広島県教育委員会スクールカウンセラー
13.2003年4月～2005年3月	香川県公立学校スクールカウンセラー

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
６．研究費の取得状況	
14.2003年4月～2005年3月 15.1998年4月～現在	徳島県非常勤特別職スクールカウンセラー 所属学会：日本心理学会、日本教育心理学会、日本犯罪心理学会、 日本学校保健学会、日本健康心理学会、日本発達心理学会、日本心理臨床学会、日本パーソナリティ心理学会、 日本認知療法・認知行動療法学会、日本カウンセリング学会、日本認知・行動療法学会、日本学校心理学会、日本マイクロカウンセリング学会